

青春

サムエル・ウルマン
訳 作山 宗久

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。

薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、
たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。

青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは怯懦を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒険心を意味する。
ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。

歳を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。
苦悩・恐怖・失望により気力は地に這い、青春は芥になる。

60歳であろうと16歳であろうと人の胸には、
驚異に魅かれる心・おさな児のような
未知への探求心・人生への興味の歓喜がある。

君にも吾にも見えざる駅逓が心にある。
人から神から美・希望・喜悦・勇氣・力の靈感を受ける限り君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、悲嘆の氷にとざされるとき、
20歳であろうと人は老いる。

頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、
80歳であろうと人は青春にして己む。

怯懦（きょうだ）臆病で意志の弱いこと

駅逓（えきてい）宿場から宿場へ荷物を届けること、郵便の古称

己む（やむ）今まで続いていたものが終わりになること。

サムエル・ウルマン

1840年ドイツ生まれのユダヤ人。アラバマ州バーミングハム市（日立市と姉妹都市）で活躍。
南北戦争に従軍。ユダヤ教の精神的指導者。実業家として活躍。市教育委員会の委員長もつとめた。
この詩は1922年に家族が発行した詩集「80年の歳月の頂から」の巻頭の詩です。
1945年リーターズタイムズに掲載、日本の多くの財界人が好んだとのこと。